

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 12 日現在

機関番号：64302

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2010～2011

課題番号：22820086

研究課題名（和文）

20世紀転換期における日本の芸術芸能の海外発信と受容—野口米次郎を軸として

研究課題名（英文）

The Overseas Transmission and Reception of Japanese Performing Art in the Transitional Period of the 20th Century: Cultural Exchange centering on Yone Noguchi

研究代表者

堀 まどか (HORI MADOKA)

国際日本文化研究センター・研究部・機関研究員

研究者番号：20586341

研究成果の概要（和文）：

20世紀初頭の欧米における芸術の転換期において、日本の芸術芸能はいかに発信され、いかに受容されたのか。本研究の目的は、野口米次郎とその周辺の文化ネットワークの実証的な検証を通して、その一端を明らかにすることであった。日本の芸術芸能への関心は、20世紀転換期の「象徴主義」「神秘思想」「東洋」といった欧米知識人たちの関心空間の中にまさに胚胎し、ギリシアや古典、伝統回帰と表裏一体で形成されていくモダニズム芸術運動と連動した。本研究では、野口を軸に、ここに介在した日本文化人と英語圏文学者との間の交流、その結果生まれた芸術芸能の相互作用の実態と内実を解明し、この時期における日本と海外の芸術交流史に新たな視点を切り開いた。

研究成果の概要（英文）：

How did Japanese Performing Arts transmit to the West and how were they accepted there in the transitional period of the 20th century? The aim of my research was to illuminate this period by validating the factual evidence of cultural exchange and humanistic network around the person of Yone Noguchi. Japan's interest in Japanese Performing Art found inspiration in the Western intellectuals who generated a respect for 'Symbolism,' 'Mysticism,' 'Orientalism,' and then geared up the artistic movement of Modernism, which was inextricably linked with 'Greek,' 'Classicism,' 'the movement of returning to tradition.' Through the investigation of the intellectual relationship and cultural human networks between the Japanese and English-speaking-spheres, I interpreted the status quo of the mutual interaction of the modern performing arts and tried to carve out a frame of reference for a cross-cultural history of the 20th century.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,080,000	324,000	1,404,000
2011年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,180,000	654,000	2,834,000

研究分野： 人文学

科研費の分科・細目： 文学 ・ 各国文学・文学論

キーワード： 芸術芸能、モダニズム、象徴主義、交流史、野口米次郎

1. 研究開始当初の背景

日本の芸術芸能の海外受容に関しては、従来にも多くの研究がおこなわれていた。19世紀末より、日本を訪れて能や狂言に初めて接した外交官や学者たち（チェンバレンやアストン等）が、能や狂言を見出して翻訳・調査し、20世紀初頭の詩人や芸術家たち（イエイツ、パウンド、ウェイリー、クロードル等）が受容して、大きなインスピレーションを受け20世紀モダニズム芸術の展開に寄与したといった点は、これまでも研究が進められてきた。しかし、欧米文化人の「日本」理解、個々の翻訳の内容に関心が集まって、日本の側からいかに発信されたか、という点については、研究が進んでいないのが現状であった。たとえば、1904年から能楽・狂言の海外発信を行っていた野口米次郎(1875-1947)——イエイツや欧米文壇人・文化人らと直接接点を持ち、日本の芸術の詩学の解説を中心に芸術芸能、浮世絵など幅広い日本文化論を発信した人物——の活動についてはほとんど研究が行われていなかった。

唯一、野口米次郎が従来の見解よりも早い段階でイエイツに能楽を解説していた事実を論じていた論文でさえも、野口の1907年当時の英語での能楽紹介がアメリカ人の紹介者の語彙と同じで「剽窃」である、欧米人の真似をした二流の日本人である、といった結論におちていた。また野口はパウンドのアドヴァイスをうけたのでは、といった時間軸の完全な誤りもあった。

国際的な文化人らの相互作用的な文化交流に関する研究として必要な作業は、まず第一に、野口米次郎やその他日本の文化人らが発信した日本語の文献資料の実証的検証、第二に、国内外それぞれにおいて、日本芸能に対する文化認識がいかに転換したかを検証し分析することである。それらの検証を経た上で、野口による能楽紹介によって初めて語られた認識（能における生と死の概念や、イエイツのアイランド近代演劇との比較の視点）が、同時代的にいかなる意味を持ち、またその後に影響を与えているのかを論究する必要があった。

日本の芸術芸能への関心や受容には、20世紀の欧米知識人の「象徴主義思想」「神秘思想」「東洋」などへの強い関心や、直接的な人的交流が連関している。20世紀転換期のロンドンの文化人・芸術家たちも神秘主義や東洋に心酔していたが、同時期のアメリカ西海岸にも同質の関心をもつ詩人、神秘主義者や

インド人、日本人、数年後にジャポニズム演劇の盛んなニューヨークに移る演劇人たちが集っていた。そして英国領植民地のインド文壇にも、英米の芸術家たちの共通の顔ぶれが見え隠れする。つまり、20世紀の文化人の相互的な文化交流・芸術交流は、アジアを巻き込んだインドやアメリカ西海岸などの英語圏全てに発生し作用したのであり、この実態を検証するために、複数のフィールドを対象として文化ネットワーク全体を考察する必要があった。

研究代表者は、野口米次郎の生涯とその歴史的意義を再評価する博士論文(2009年9月提出)の中で、野口の狂言能楽の紹介の意義について論じていたが、それを、野口の個別の検証ではなく、国際的な文化交流の相互作用の研究として発展・展開させ、さらに資料文献を精査して緻密な実証検証を行う必要があった。

2. 研究の目的

上記のような研究状況を背景に、20世紀初頭の日本の芸術芸能の発信と受容について、野口米次郎を軸に、そこに介在した日本文化人と英語圏文学者との間の交流、その結果生まれた芸術芸能の相互作用の実態と内実を解明し、この時期における日本と海外の芸術交流史に新たな視点を切り開くことを目的とした。

日本の芸術芸能への関心や受容には、20世紀の欧米知識人の「象徴主義思想」「神秘思想」「東洋」などへの強い関心や、直接的な人的交流が連関している。20世紀転換期のロンドンの文化人・芸術家たちも神秘主義や東洋に心酔していたが、同時期のアメリカ西海岸にも同質の関心をもつ詩人、神秘主義者やインド人、日本人、数年後にジャポニズム演劇の盛んなニューヨークに移る演劇人たちが集っていた。そして英国領植民地のインド文壇にも、英米の芸術家たちの共通の顔ぶれが見え隠れする。つまり、アジアを巻き込んでインドやアメリカ西海岸などの英語圏全てに発生し作用した20世紀の相互的な国際文化交流・芸術交流の実態を検証すること、複数のフィールドを対象として文化ネットワーク全体像を地図化して考察することが、本研究の目的であった。

3. 研究の方法

(1) ①従来注目されてこなかった日本側からの「発信」と海外「受容」に関して、英語圏の三つのフィールド（イギリス、アメリカ、インド）から関連資料を収集・整理した。
②欧米人が日本の芸術芸能の何に対して「神秘」「象徴」を感じて関心をもったのか、また日本の側から何をいかに発信して、詩的「日本」のありようや自国の「伝統」を創造しようとしたのか、ということが実証的な解明を試みた。
③欧米の「象徴主義」に因を發した神秘思想やユニテリズムと、モダニズム芸術の関係の解明を試みた。

具体的な作業方法は、

(a.)野口米次郎を軸として、20世紀転換期のロンドン、インド、アメリカ西海岸の英語圏知識人たちの文化ネットワークの繋がりを探った。

(b.)20世紀初頭の日本の雑誌類を調査し、能楽ジャーナリズムや演劇の近代化を牽引した日本人たちの背景や交友関係を調査した。

(c.)野口の周辺の知識人を中心に精査して、20世紀転換期のアメリカ西海岸の文化人、詩人、象徴主義者、神秘主義者、アジア人の文化ネットワークの実態に関する資料文献を蒐集し、日本文化やインド文化や神秘主義思想の英語圏での受容状況を明らかにした。

(d.)野口が直接交渉をもった英国の知識人たちや彼等の主催した英雑誌を中心に分析し、20世紀初頭のロンドンの芸術家の人形劇、仮面劇、劇の内部の神秘性などについての関心と、当時注目されていた日本の芸術芸能の枠組みと内部理解とを検証した。

(e.)インドにおける欧米圏知識人らとの人的交流と、日本やアジアとの人的交流について、新聞雑誌の資料文献を精査して文化ネットワーク関係を緻密に跡づけることを試みた。日本の芸術芸能の海外受容をアジアの視点から比較検討するために、野口米次郎が直接交渉をもった国際派の舞踏家ウダイ・シャンカールについての背景と評価を検証した。

(2) 現地調査の後には、蒐集した文献資料を整理・分析し、「発信」「受容」の文化交流と、人的交流のネットワークを地図化した。同時に、関連する国内の研究会や国際学会で研究成果を発表・発信して、本研究の方法論について意見交換し、今後の研究の連携についての可能性を探った。

4. 研究成果

(1) 20世紀初頭の欧米で、日本の芸術芸能がどのように発信され受容されたかを解明するため、野口米次郎周辺の日本文化人と英語圏文化人の交流の実態について調査した。

①2010年1月アメリカ（カリフォルニア州）調査

(a.)カリフォルニア大学バークレー校のバンククロフト図書館での文献調査。

(b.)サンフランシスコの劇場「Theater of Yugen」の創設者と現在の舞台監督に対するインタビュー調査。

(c.)オークランドでの1890年代の文化人コミュニティの調査。

②2010年2月インド調査

(a.)ベナレス・ヒンドゥー大学の創設者マーラヴィーア記念館やブダガヤ日本図書館その他での文献調査。

(b.)カジュラホ、エローラ、アジャンタでの古代壁画、日本人画家・野生司香雪による近代寺院壁画の視察。古代遺跡や彫刻・美術の中における芸能のあらわれかたについて調査。

(c.)インドの地方芸能、インドの人形芝居、現代野外劇の鑑賞・分析。

(d.)現地発行の図書資料や文献の収集。

③2011年5月国内調査。英文で国外への発信を試みた日本の能楽雑誌『謡曲界』『能楽』についての文献調査。

④2011年8月国内調査。日本語雑誌『詩と音楽』のなかにみられる、舞踊と音楽についての革新意識をさぐる文献調査。

⑤2012年3月ロンドン調査。雑誌『Musk』の1900～10年代の動向をさぐり、ゴードン・グレイグの日本の芸能への関心の所在などを調査・分析。

(2) 本研究に関連する情報や知見を得るために、学会参加や学会発表に積極的に努めた。そこでは個別の情報収集に加えて、研究の方法や概念の考え方に関する教示を得た。

①2010年度には、国内（東京、京都）で3回、国外（ソウル）で1回の研究発表を行い、研究の状況や意義を披露し公開した。またその中で、海外で舞台公演を行った日本人やその研究について、またアメリカの神秘主義者の活動に関する情報についての知識を得た。

②2011年度には、国外（バングラデシュ・ダッカ）での演劇学の国際学会で、本研究で取り組んできた成果と方法論の是非を問う口頭発表を行った。特に、野口米次郎と国際的舞踏家ウダイ・シャンカールの関係についての

調査結果に対しては、南アジアの研究者たちから高い関心と評価を受け、本研究に関連する情報や知見をさらに深めることができた。また、南アジアの英文学科や演劇学科の教授陣らと今後の共同研究の可能性や必要性について意見交換ができた。演劇や舞踊など肉体的表現を实践する立場の役者たちと、演劇の教育的な可能性やアジア芸能の将来性について話を聞き、本研究の捉え方に関する示唆を得たことも大きな成果である。加えて、現地で芸能を見る機会を得て、日本の能や歌舞伎と、バングラデシュの「語り」を主体にした地域芸能についての、比較考察を行うことができた。

(3) 本研究の成果の一部として、雑誌論文2編を発表し、共著3冊、単著1冊を刊行し、成果を公開した。

①2010年度には、宝塚創設者・小林一三の歌舞伎の近代化と海外進出に関する論考を、共著『「Japan Today」の研究』の中の一部として発表している。その他、野口とインドの文化人や演劇人の交流に関連する英語の論文を発表した他、本研究の成果を出版物として公開することに努めた。

②2011年度には、著書『「二重国籍」詩人 野口米次郎』(名古屋大学出版会)を刊行し、とりわけ本研究でおこなった成果の一部としては、19世紀末から20世紀初頭のアメリカ西海岸のアジア受容とモダニズム芸術運動の兆しに関する研究や、日本の芸術芸能の発信と受容に関する日本側の潮流について考察した結果を公開した。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計3件)

(1) 堀まどか、「Yone Noguchi and India: Towards a Reappraisal of the International Conflict Between R. Tagore and Y. Noguchi」、『Changing Perceptions of Japan in South Asia in the New Asian Era: The State of Japanese Studies in India and Other SAARC Countries』(国際シンポジウム報告書)、査読無、1911、119-128

(2) 堀まどか、「野口米次郎・タゴール論争——第二次世界大戦期の民族主義一側面」、『近代東アジアにおける鍵概念—民族、国家、民族主義』(国際シンポジウム報告書)、査読無、2011、69-83

(3) 堀まどか、「Yone Noguchi Overseas Transmission and Reception of Japanese Performing Arts in the Transitional Period of the 20th Century」、『Towards Oriental Theatre Studies』(国際シンポジウム報告書)、査読無、2012、38-52

[学会発表] (計5件)

(1) 堀まどか、「野口米次郎のインドとの関係」、日本比較文学会第72回全国大会、2010年6月19日、東京工業大学(東京)

(2) 堀まどか、「Yone Noguchi's Poetics as a Writer of 'Dual Nationality」、The XIXth Congress of the International Comparative Literature Association (国際比較文学学会)、2010年8月17日、Chung-Ang University(中央大学校)、ソウル・韓国

(3) 堀まどか、「20世紀前半期の日本の芸術芸能の国外発信と芸術概念の編成」、共同研究会「東アジア近現代における知的交流—概念編成を中心に」、2010年10月17日、国際日本文化研究センター(京都)

(4) 堀まどか、「大正から昭和期の日本詩歌のなかの身体」、共同研究会「身体と文明」、2010年11月27日、国際日本文化研究センター(京都)

(5) 堀まどか、「Yone Noguchi Overseas Transmission and Reception of Japanese Performing Arts in the Transitional Period of the 20th Century」、International Conference on Towards Oriental Theatre Studies 2012, Organized by Department of Drama and Dramatics Jahangirnagar University in collaboration with Japan Foundation、2012年1月8日、Jahangirnagar University、ダッカ(バングラデシュ)

[図書] (計4件)

(1) 鈴木貞美(編)、堀まどか、他、作品社、『「Japan Today」の研究—戦時期「文藝春秋」の海外発信』、2011、375

(2) Shigemi INAGA(ed.), Madoka HORI、他、『Artistic Vagabondage and New Utopian Projects: Transnational Poietic Experiences in East-Asian Modernity(1905-1960)』、2011、138

(3) 浅岡邦雄、鈴木貞美(編)、堀まどか、他、作品社、『明治期「新式貸本屋」目録の研究』(日文研叢書)、2011、423

(4) 堀まどか(单著)、名古屋大学出版会、
『「二重国籍」詩人 野口米次郎』、2012、592

6. 研究組織

(1) 研究代表者

堀 まどか (HORI MADOKA)

国際日本文化研究センター・研究部・機関
研究員

研究者番号：20586341